

## 【卒業生寄稿】

ポルトガル語学科の後輩の皆様へ

濱田 圭司  
駐モザンビーク特命全権大使  
(1985年卒業)

ポルトガル語学科の皆様、こんにちは。私は1980年にポルトガル語学科に入学し、85年に卒業して外務省に入りました。入省後に専門語学を指定されるのですが、私の場合はポルトガル語学科を卒業し外務省の専門職試験をポルトガル語で受験したこともありポルトガル語を指定されました。従いまして、入省後のキャリアとしては大凡ですが、1/3を本省、1/3をブラジル、1/3をアフリカ（モザンビーク、ジンバブエ、ボツワナ）で勤務し、2024年1月から駐モザンビーク大使として首都マプトで勤務しております。モザンビーク勤務は3回目となりますが、10年ぶりに訪問し、その発展ぶりに驚いているところです。モザンビークは天然ガスの開発が注目されている南部アフリカのインド洋に面した国です。

入省後、本省では国際協力に係る部署に主に勤務し、ポルトガル語を使う機会はあまりありませんでしたが、ポルトガル語圏の在外公館では当然のことながら通訳を含めポルトガル語を使用し仕事をしておりました。語学の向上のため、ポルトガル語の通訳案内士の資格を取得したほか、ブラジルでは **Celpe-Bras** という教育省のポルトガル語検定試験にもチャレンジしました。大使として当国に赴任したことを契機として、これからも語学の向上に努めていきたいと改めて決意した次第です。ちなみにモザンビークのポルトガル語は私の個人的な印象では文法的にはポルトガルのポルトガル語に近いですが、発音はポルトガルとブラジルの中間のようであり比較的聞き取りやすいと思います。

語学の向上以外では、外務省にインターンとして勤務する院卒の職員に刺激されて、50歳前に、通勤途中にある青山学院大学の国際政治経済学部修士課程で勉強しました。本省で勤務しながらの勉強でしたが、勤務時間をフレックスにして勤務終了後に、また、主に土曜に授業を受けておりましたが、本格的に国際政治を学ぶのは非常に刺激的であり、また25年ぶりのキャンパス生活はとても楽しく、上智大生のころを思い出しました。上智大生のころはできなかつたと思いますが、修士課程ではインターネットを活用し、引用する論文や書物を探しながら修士論文を書き上げました。テーマは外務省での勤務と関係のある英国の援助政策についてでした。卒業後は、勉強中には手の届かなかった国際政治の古典といわれる本を海外で読むことを趣味にしております。同時に戦前の外交官の先輩方の自叙伝も読みましたが、この時代でも海外赴任の生活に共感する部分が多く、また、激動の時代背景の中でも語学の向上に熱心に取り組んでおられる姿にも感銘を受けました。

縁があり上智大学でポルトガル語を勉強することになりましたが、国連の公用語ではな

いポルトガル語は一般に特殊語学として分類されております。モザンビークは英語圏に囲まれコモンウェルスに属することもあり英語が話せる政府高官も多いのですが、やはりポルトガル語（本来の現地語もあるのですが地方により異なるのでポルトガル語は共通語としての役割も果たしています）で話すとお互い話しやすいことから業務上非常に役立っております。また、ポルトガル語を通じて、日本の反対側で広大な国土を有し、豊富な鉱物・農業資源に恵まれ、且つ我が国に非常に関心の高い世界最大の日系社会が存在するブラジルを知ることができたのも非常に良かったと思います。

最近の若者は海外に対する関心が低くなっていると聞きますが、海外に出ることにより外国の文化が体験できるだけでなく日本の良さを再発見する機会にもなります。また、日本にいただけでは語学は簡単には身につけません。海外で短期間でも生活し、その言葉を話してこそ身につくものだと思います。またポルトガル語を勉強するだけでなく国際政治にも関心を払い勉学に励んでください。言葉はあくまでも手段であり、自分が話すサブスタンスを身につけるための勉強も必要です。

外務省では上智大学ポルトガル語学科卒の優秀な後輩もおりますが、この寄稿をきっかけとして現在現役の学生の皆様が外務省に入省し日本の外交を盛り上げてくれることを期待したいと思います。